

# 概念の関数モデルの歴史と哲学

浅野 将秀 (Masahide Asano)

東京都立大学

エルンスト・カッシーラーの『実体概念と関数概念』(1910)を通じてよく知られるように、ヘルマン・ロツツェは自身の論理学著作(Lotze 1843, 1874/1912)の中で伝統的な抽象主義を批判し新たな概念モデルを提案する。ロツツェの概念論はHeis (2008)などの先行研究により「概念の関数モデル」と呼ばれるが、その骨子は、(1) 概念を(「普遍徴標」と呼ばれる)属性ないし比較の観点からなる相互依存的な構造として捉え、(2) 下屬する諸事例を(「特殊徴標」と呼ばれる)各々の属性がとりうる値の組として表現する、という二点に要約される。また、先行研究を通じて明らかにされたように、このようなロツツェの着想は、カッシーラーの哲学に多大な影響を与え、彼の「関数概念」の理説のライトモチーフになったと考えられる。

ところで、哲学史から離れて、概念の構造とその表現を主題とした現代の諸研究に目を向けてみると、以上のようなアイデアがごく自然な形で採用され、有用なモデルとして利用されていることに気づく。例えば、「関係モデル (relational model)」として知られるデータベースモデルやGärdenfors (2000)の「概念空間 (conceptual space)」、さらにはFloridi (2011)の「抽象化レベルの手法 (The Method of Level of Abstraction)」といった理論的枠組みにはさまざまな点で概念の関数モデルとの親近性が認められる。このような事情を考慮すれば、ロツツェやカッシーラーにより提起された概念の関数モデルが、たんなる哲学史上の奇矯としてではなく、我々の概念の本質やその働きについて重要な洞察を備えた理説として検討されるべきものであるということはほとんど明らかであろう。

以上のような見通しの下、本発表では次の二つの問題について検討することにしたい。第一に、概念の関数モデルを採用する理論的根拠 (rationale) としてロツツェはどのようなものを考えていたのか。第二に、ロツツェが概念の関数モデルを構想するに至った背景にはいかなる歴史的蓄積があるのか。第一の問題について、本発表では概念論におけるロツツェの議論に加え、概念論が多く参照される「分類 (Classification)」にかんする考察 (Lotze 1874/1912: III-C) について検討する。第二の問題については、Lotze (1843)の序論での議論を下敷きに、ロツツェの概念論とカントの超越論的図式との関係について、そして、カッシーラーの指摘を手がかりに、ヘーゲルの具体的普遍の理説との関係について、それぞれ概要を簡単に紹介する。

本発表では、以上の作業を通じて、ロツツェの概念論を軸に概念の関数モデルの歴史と哲学についておおまかなヴィジョンを与え、ワークショップ全体の出発点を設定することを試みたい。

参考文献

- Cassirer, E. (1910). *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntniskritik*. Berlin: Bruno Cassirer.
- Floridi, L. (2011). *The Philosophy of Information*. Oxford University Press.
- Gärdenfors, P. (2000). *Conceptual Spaces: The Geometry of Thought*. The MIT Press.
- Heis, J. (2008). *The Fact of Modern Mathematics: Geometry, Logic, and Concept Formation in Kant and Cassirer*. University of Pittsburgh: Ph.D. dissertation.
- Lotze, H. (1843). *Logik*. Leipzig: Weidmann.
- Lotze, H. (1874/1912). *Logik. Drei Bücher; vom Denken, vom Untersuchen und vom Erkennen*. Leipzig: Felix Meiner.
- 浅野将秀. (2020). 『論理学』(1874)におけるロツツェの概念論. 『哲学誌』(62), 103-128.